



The Pragmatics Society of Japan

日本語用論学会

NEWSLETTER

<http://www.pragmatics.gr.jp>

No.36 / Autumn 2016

会 長 加藤 重広

事務局 〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町 1

京都ノートルダム女子大学 人間文化学部英語英文科 小山哲春 研究室内

事務局連絡先 psj.secretary@gmail.com

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名：日本語用論学会

ゆうちょ銀行 ○九九支店 当座預金 店番号 099 口座番号 0130378 日本語用論学会

三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号546 口座番号3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

★副会長就任のご挨拶

山本英一（関西大学）

日本語用論学会の会員の皆さま、いつも学会運営にご協力・ご支援いただき、ありがとうございます。今春より体制が新しくなり、加藤重広会長のもと、次の世代に向けて歩みを進めることになりました。

初代・小泉保会長が学会を創設されましたのが1998年10月でしたので、18年の歳月が流れたことになりました。私自身、その小泉先生が大阪にて研究・教育に携わられるようになった際の大学院「第1期生」でもあり、そこまで遡りますと、30年以上の時間が経過しました。今こうして、ひとつ世代が交代したと思いますと、非常に感慨深いものがあります。

ご承知のとおり、語用論の射程はきわめて広く、学会趣意書の言葉を借りれば、語用論研究は「意味論、統語論、社会言語学、心理言語学、認知言語学それに日本語を始めとするさまざまな語学教育などの活動が交差する領域を占め、21世紀へ向けての展望は洋々たるもの」があります。実際のところ、きわめてアットホームな雰囲気の中で産声をあげた本学会も、今では会員数600名を教える大世帯にまで成長しました。これも、歴代会長とそれを支える運営委員の弛まない努力、そして会員の皆様の旺盛な研究意欲とご支援の賜物と思っております。

私自身は、語用論の中でも推意の産出と解釈にかかるメカニズムを中心に関心があるものの、職務の関係で、英語教育における語用論の扱いについて学生とともに考える機会が多くあります。いわば教員の卵、あるいは現役の教員とこの問題を論じることが大きな仕事になっています。コミュニケーションの現場では、コンテキスト抜きに発話の意味を論じることはいわゆる、推意はもとより、発話行為、ポライトネス、ダイクシスといったコンセプトを知らずして英語（言語）を教える（学ぶ）ことは不可能と言えるでしょう。

しかし、「コミュニケーションで通用する英語」というお題目はよく耳にするものの、果たして語用論の知見が日本の英語教育に十分活かされているかという、きわめてお寒い状況にあると言わざるをえません。語用論が関わる領域は黒白が明確な世界ではなく、容認度という緩やかな傾斜に依存する世界であるがゆえに、受験指導に没頭する高校教師からは目の敵にされ、テストやモチベーション等に関心のある教師の卵からは、しち面倒くさい（屁）理屈として敬遠されがちです。

本学会の理事でもある西光義弘先生が、もう20年以上も前に「幻の語用論参考書」と呼ばれた本格的な書物が、いまでも世に現れない一因がここにもあるように思えます。本学会で展開される研究の成果が、教育の一隅もさらに照らしてくれることを期待しつつ、ご挨拶に代えさせていただきます。

* 日本語用論学会第19回大会ご案内 *

2016年度の第19回大会は、以下のとおり、下関市立大学での開催となります。会員の皆様のご参加をお待ちしております。なお、変更などがあれば語用論学会のHPで更新していきますので、ご確認ください。

◆日時・場所

2016年12月10日(土),11日(日)

下関市立大学

<http://www.shimonoseki-cu.ac.jp/>

山口県下関市大学町二丁目1番1号

TEL 083-252-0288 (代表)

◆主なプログラム

《12月10日(土)》

9:30 受付開始

10:00~11:40 ワークショップ

11:50~12:50 ポスター発表①

(昼食休憩/会員総会)

13:20~15:15 研究発表

15:25~17:55 シンポジウム

18:10~20:00 懇親会

(一般4000円, 学生3000円。参加費は大会受付にてお支払いください)

《12月11日(日)》

9:00 受付開始

9:30~11:25 研究発表

11:30~12:30 ポスター発表②

13:00~14:30 基調講演

講演者: Gunter Senft 氏

(マックスプランク心理言語学研究所)

14:40~15:40 会長就任講演

「文脈の科学としての語用論」加藤重広

15:40~15:50 閉会式

◆シンポジウム

(12月10日(土) 15時25分~17時55分)

「認知言語学と語用論は文化差をどのように捉えるか」

登壇者: 江文瑜氏(国立台湾大学), 今井むつみ氏(慶応義塾大学), 林誠氏(名古屋大学)

ディスカッサント: Gunter Senft 氏

司会: 北野浩章(愛知教育大学)

How do pragmatics and cognitive linguistics approach cultural differences?

Chair: KITANO, Hiroaki (Aichi University of Education)

Speakers: CHIANG, Wen-yu (National Taiwan University) Guard our hearts with love: The study of

Chinese characters with the "heart" radical

IMAI, Mutsumi (Keio University) How culture affects children's use of social and pragmatic cue in their inference of word meanings

HAYASHI, Makoto (Nagoya University) Conversation analysis and cross-linguistic/cross-cultural comparison

Discussant: SENFT, Gunter (Max Planck Institute for Psycholinguistics)

Introduction 5 min. (Chair)

Presentations (30 min. each)

Commentary 20 min. (Discussant)

Response to the commentary & questions/comments within the panel 10 min.

General Discussion 25 min.

◆基調講演

(12月11日(日) 13時00分~14時30分)

Title: Understanding Pragmatics

Lecturer: Prof. Gunter Senft

Max Planck Institute for Psycholinguistics

Pragmatics is the discipline within linguistics that deals with actual language use. Language use is not only dependent on linguistic, that is, grammatical and lexical knowledge, but also on cultural, situative and interpersonal contexts and conventions. One of the central aims of pragmatics is to research how context and convention - in their broadest sense - contribute to meaning and understanding. Thus, the social and cultural embedding of meaning is a central prerequisite for understanding pragmatics. Research in linguistic pragmatics deals with how speakers use their language(s) in various situations and contexts: what speakers do when they speak and why they do it. Pragmatics focuses on the actual language users, their communicative behavior, their world and their point of view. Pragmatics studies language and its meaningful use from the perspective of language users embedded in their situational, behavioral, cultural, societal and political contexts, using a broad variety of methodologies and interdisciplinary approaches depending on specific research questions and interests. Indeed, if we look at core domains of the discipline, we realize that linguistic pragmatics can be regarded as a transdiscipline that is relevant for, and has its predecessors in, many other disciplines such as Philosophy, Psychology, Ethology, Ethnology, Sociology and the Political Sciences. In this talk I take up this point and discuss a selection of core issues of Pragmatics that were introduced into the field via these six disciplines.

◆Post-conference open lecture

主催: 日本語用論学会

共催：日本語用論学会中部支部

日時：12月12日（月）午後5時～6時半

場所：名古屋大学（東山キャンパス）

全学教育棟北棟4階406室

<http://www.nagoya-u.ac.jp/access-map/>の「B4-1」
名城線地下鉄「名古屋大学駅」1番出口より徒歩約5分

The Trobriand Islanders vs H.P. Grice: Kilivila and the Gricean maxims of quality and manner
Prof. Gunter Senft
Max Planck Institute for Psycholinguistics

Abstract:

The Gricean conversational maxims of Quality? “Try to make your contribution one that is true”? and Manner “Be perspicuous”, specifically “Avoid obscurity of expression” and “Avoid ambiguity” (Grice 1967; 1975; 1978) - are not observed by the Trobriand Islanders of Papua New Guinea, neither in forms of their ritualized communication nor in forms and ways of everyday conversation and other ordinary verbal interactions. The speakers of the Austronesian language Kilivila metalinguistically differentiate eight specific non-diatopical registers which I have called “situational-intentional” varieties. One of these varieties is called “biga sopa”. This label can be glossed as “joking or lying speech, indirect speech, speech which is not vouched for”. The biga sopa constitutes the default register of Trobriand discourse and conversation. This contribution to the workshop on philosophy and pragmatics presents the Trobriand Islanders’ indigenous typology of non-diatopical registers, especially elaborating on the concept of sopa, describing its features, discussing its functions and illustrating its use within Trobriand society. It will be shown that the Gricean maxims of quality and manner are irrelevant for and thus not observed by the speakers of Kilivila. On the basis of the presented findings the Gricean maxims and especially Grice’s claim that his theory of conversational implicature is “universal in application” is critically discussed from a general anthropological-linguistic point of view.

*** 地区研究会コーナー ***

◆ 第3回 日本語用論学会九州山口地区語用論研究会の実施報告

3月16日（水）、九州大学伊都キャンパスにて日本語用論学会の地区研究会を開催した。当日は約15名が参加し、4件の発表があり、各発表後に活発な議論と意見交換が行われた。(1) 土屋智行（九州大学大学院言語文化研究院助教）「メディアを介したコミュニケーションと定型性」、

(2) 単アイテイ（九州大学大学院地球社会統合科学府博士後期課程1年）「新聞社説の見出しの日中対照研究—見出しの機能を中心に—」、(3) 吳青青（九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程2年）「相互行為における「なんか」についての一考察」、(4) 王欣（九州大学大学院地球社会統合科学府修士課程2年）「日本語と中国語の談話における「ほめ」の対照研究」。いずれも学年は開催時のもの。このうち土屋智行氏は録画資料を基にし、ことばの定型性を明らかにする研究を発表し、その斬新な方法が魅力的に思われた。また、王欣氏の発表は自分の修士論文をもとにしたもので、日本人と中国人では、称賛と称賛に対する反応が違うことをアンケート調査から明らかにしようとするものだった。日本人の感覚からすると、ほめすぎではないかと思われることばを中国人が選ぶ傾向にあることが分かり、意外性あって興味深かった。九州大学大学院地球社会統合科学府は中国からの留学生が多いが、中国人から見た日本人と日本語の特徴を語用論的に分析する研究が数多く積み重ねられてきており、地区研究会でも毎回、実験的な試みが紹介されている。（西田光一）

◆ 関東地区では、今年度は以下のように日本語学、認知言語学、とりわけ構文論、意味論、語用論をご専門としていらっしゃる尾谷昌則先生にご講演をお願いしております。（井上逸平）

日本語用論学会関東地区講演会

講師：尾谷昌則先生（法政大学文学部教授）

演題：未定

日時：2017年1月21日（土）

場所：慶應義塾大学三田キャンパス

◆ メタファー研究会

メタファー研究会は、関西支部と共催で、「メタファー研究会夏の陣」を7月2日（土）13:00-17:40に京都大学吉田キャンパス 吉田南構内総合人間科学棟1102教室で開催いたしました。「コーパスを利用したメタフォリカル・パターン・アナリシス（MPA）の紹介—FEARのメタファーを例に」中野阿佐子（関西大学[院]）「感情の比喩—字義表現の産出過程—」岡隆之介（京都大学[院]）「＜感情は液体＞メタファー表現の成立基盤と制約—概念メタファー理論の「まだら問題」をめぐって—」後藤秀貴（大阪大学[院]）ディスカサント松本曜（神戸大学）・鍋島弘治朗（関西大学）「気象現象と日本語メタファー表現—光と遮蔽物をめぐって—」松浦

光 (名古屋大学 [院]) 「人の心と空模様 : シェイクスピアのメタファーをめぐって」大森文子 (大阪大学) 「比喩の面白さ認知のメカニズム : “わかる”ほど面白い?」平知宏 (大阪市立大学)

約 60 名の参加を得て、活発な議論が行われました。今回は、語用論学会年次大会 (下関) のワークショップ、その次は 3 月 16 日 (木) に関西大学で「時間のメタファー」をテーマに行われる予定ですので皆様ぜひお誘いあわせの上ご参加下さい。(鍋島弘治朗)

★『語用論研究』編集委員会より

SIP18 投稿ありがとうございました! 今回、研究論文9本、研究ノート4本、計13本の投稿がありました。審査結果はすでに投稿者にお戻ししています。最終的な掲載本数などはお知らせできませんが、若い研究者の活躍できる場でありたいと願っています。

SIPの活性化に具体的な策を講じたいと考えています。また、投稿～査読のプロセスについても、投稿規定の明確化をはじめ、細々した問題の解消を図ります。若干の変更が生じるかと思しますので、ウェブページの「お知らせ」などご注意ください。SIP19 もよろしく願います! (編集委員長・滝浦真人)

★大会運営部プロシーディング委員会より

2015年度第18回大会論文集掲載予定の論文数をご報告いたします

研究発表 (日本語) 14本

研究発表 (英語) 7本

ワークショップ発表 (日本語) 7本

ポスター発表 (日本語) 13本

ポスター発表 (英語) 2本

合計で 43 本が掲載予定です。

なお、本学会では第 8 回大会より『大会発表論文集』を発行しておりますが、2015年度第18回大会の論文集は、学会のホームページで公開される予定です。(委員長・首藤佐智子)

《事務局より》

★会費納入のお願い

◆会費未納年度がある場合、払込取扱票を同封させていただいております。年会費は、一般会員 5,000 円、学生会員 4,000 円、団体会員 6,000 円でございます。11 月までに、ご納入いただきますよう、よろしくご願ひ申し上げます。行き違いでご入金済みの場合は、ご容赦ください。

1. 同封の払込取扱票をご利用の場合 :

郵便振替口座: 00900-3-130378 (ゆうちょ銀行)
口座名: 日本語用論学会

2. ATM から振り込まれる場合 :

ゆうちょ銀行 支店名 : 099 当座 口座番号 : 0130378 口座名 : 日本語用論学会

3. ATM から銀行口座へ振り込まれる場合 : 三井住友銀行 学園前支店 普通預金 店番号 546 口座番号 3755278 日本語用論学会 長友俊一郎

4. クレジットカードをご利用の場合 :

学会ホームページの「会員用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。

★《新刊・近刊案内》

■『認知言語学』全 5 巻 山梨正明 (京都大学名誉教授) 編・序文 学術論文集成 極東書店 セット定価 168,210 円 (税込)

Cognitive Linguistics

SAGE Benchmarks in Language and Linguistics

Edited by Masa-aki Yamanashi (Emeritus Professor of Kyoto University)

Vol. 1 Theory and Method

Vol. 2 Cognitive Phonology and Morphology

Vol. 3 Cognitive Grammar and Syntax

Vol. 4 Cognitive Semantics

Vol. 5 Cognitive Linguistics and Related Fields

「認知言語学」は 1970 年代にその萌芽的な研究が開始され、1980 年代以降、ロナルド・ラネカー、ジョージ・レイコフ、チャールズ・フィルモア、等を中心に急速に発展してきた新しい言語学のパラダイムです。自律的な記号系を前提とするこれまでの形式的な言語研究とは異なり、「認知言語学」は、言葉を身体化された人間の一般的な認知能力と運用能力のダイナミックな発現系として捉えていく新しい言語学のアプローチとして注目されています。認知言語学の研究は、言葉のメカニズムの背後に存在する心と脳の機能の解明を試みる認知科学、言葉の創造性のメカニズムの解明に関わる人文科学の分野においても重要な役割を担っています。

本論文集は、日本の認知言語学の分野において指導的役割を果たしてこられた山梨正明教授 (日本認知言語学会前会長、京都大学名誉教授) の編纂による、認知言語学と関連分野の最先端の基本文献を収録した貴重な論文集です。その内容は領域横断的に多岐にわたり、認知言語学の理論と方法論、音韻・形態論、文法論、意味論、語用論、コーパス言語学、言語習得、言語教育をはじめ、科学哲学や脳科学、心理学、詩

学、修辞学、文学研究などの関連領域に至るまで、精選された最先端の重要文献を全5巻に収録しております。

また、本論文集は、編者による認知言語学の研究プログラムの進展と、認知科学および人文科学の関連分野への貢献、今後の研究の展望に関する詳しい解説がなされています。さらに付録として、認知言語学の関連分野をはじめとする、古典的な論文、著書、論文集、等の網羅的な文献リストが掲載されています。将来的にも長く参照すべき文献として、本論文集をお薦めいたします。(2016年8月刊)

◆推薦の言葉 (ロナルド・ラネカー教授)

“A notable feature of this 5-volume work is the scope of its coverage. The articles selected represent a wide range of authors and cover many areas of cognitive linguistic research spanning the several decades of its history. This collection performs the useful service of bringing together an array of classic papers that for many scholars may no longer be known or easily accessible. It is valuable for providing a good sense of the breadth of cognitive linguistics, the diversity of its approaches, and its development over the years.” Ronald W. Langacker, University of California, San Diego

■『メタファーと身体性』鍋島弘治朗著 ひつじ書房 (定価 5,800 円 + 税)

日本における認知メタファー理論研究の第一人者による最新作。認知科学の重要なキーワードになりつつある“身体性”を、アフォーダンス、ミラーニューロンなどを含めて脳科学の研究成果を紹介しながら概説。さらにアリストテレスからレイコフに至る理論に接続し、身体性メタファー理論の原理を提示する。メタファーとシミリ、メタファーの実験的パラダイムの紹介、進化との関連、コーパスを利用したメタファー研究、政治、マーケティングなど、幅広い研究動向にも切り込んだ好書。(2016.9.19刊)

■『認知日本語講座第5巻 認知語用論』小山哲春・甲田直美・山本雅子 (著) くろしお出版 (定価 3,700 円 + 税)

発話やテキスト・談話の分析に、認知語用論の研究姿勢が有効であることを示す。さらに、社会認知語用論による発話理解モデル、一般的認知能力と語用論的解釈、語りの語用論といった、最新の認知言語学の視点から見た成果を紹介する。(2016.9.26刊)

■『コミュニケーションのダイナミズム 自然発

話データから』井出祥子・藤井洋子 (監修)、藤井洋子・高梨博子 (編) ひつじ書房 (定価 2,600 円 + 税)

シリーズ「文化と言語使用」第1巻。日本語の言語使用にみる「場」の共創、感情表出の指示詞、反応発話、即興的に生まれる遊びや身体化の視点などから言語コミュニケーションのメカニズムや多様性、ダイナミズムについての考察を展開する。2011年日本女子大学文学部主催のシンポジウムをもとに書籍化。執筆者は熊谷智子、菅原和孝、鈴木亮子、高梨博子、成岡恵子、藤井洋子。(2016.3.18刊)

■『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』森勇太著 ひつじ書房 (定価 7,000 円 + 税)

現代日本語では「やる」「くれる」「もらう」などの授受表現があり、これらを適切に運用して聞き手や話題の人物を待遇することが重要であるが、古代語においては待遇面で同様の機能を持つ敬語の運用が重要であった。本書では、聞き手への言語的な配慮が必要となる、行為指示表現(依頼・命令等)や行為拘束表現(申し出等)といった策動の発話行為に注目し、通時的に授受表現の運用が重要視されていく過程を示す。(2016.2.16刊)

■広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思っておりますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

涼しくなったと思ったら急にまた暑くなったりと、身体を適応させていくのが難しい季節ですが、いかがお過ごしでしょうか。今後も、単なる事務局からのお知らせだけではなく、何か会員の皆様からの声をお届け出来たらと思っております。ニューズレターにご投稿ご希望の方は、どうぞ担当者までお知らせ下さい。

(堀田秀吾 記)

<2016 年度年次大会会場・下関市立大学への交通・宿泊について>

〔交通について〕

【1】新幹線をご利用の場合、新下関駅で下車してください。その後、

(1)新下関駅前からサンデンバス 2 番のりば、川中豊町線に約 20 分乗車、「大学町二丁目」バス停で下車、徒歩約 2 分で下関市立大学です。学会当日は「大学町二丁目」バス停に学生役員が立ち、案内します。

■ 新下関駅前 2 番バスのりば時刻表

時	土日祝	時	土日祝
6	08 41	13	08
7	09 19 27 31	14	11
8	12 36 52	15	05
9	09	16	28
10	25 38	17	26
11	21 55	18	03
12	37		

(すべて下関駅行き。経由は 2 系統ありますが、どれでも「大学町二丁目」で下車して下さい。)

また、新下関駅前からタクシーを利用した場合、下関市立大学までは 1500 円程度です。

(2)新下関駅で JR 山陽線に乗り換え、2 駅目の下関駅で下車、下関駅前 3 番、5 番のりばからサンデンバスに約 25 分乗車、「山の田」バス停で下車、徒歩 5 分で下関市立大学です。但し、3 番のりばから「川中豊町線」のみ「大学町二丁目」で下車して下さい。学会当日は「山の田」バス停から学生役員が案内します。3 番のりばの方がバスの本数が多く、1 時間に 5~7 本は出ていて便利です。時刻表は現地でご確認ください。

【2】飛行機をご利用の場合

(1)山口宇部空港からはバス(約 75 分)で下関駅まで来てください。下関駅からは上記【1】(2)をご参照ください。

(2)北九州空港からはスターフライヤー便をご利用の場合、事前予約の上、乗り合いタクシーで(約 60 分)で下関市立大学まで直行できます。

【3】お帰りの際のバス停

(1)新下関駅方面にお帰りの方は「大学町二丁目」バス停(但し、大学町二丁目から「川中豊町線」のみ、車線が大学側で違い、下関駅行きですのでご注意ください)を、(2)下関駅方面にお帰り

の方は「山の田」バス停をご利用ください。

〔宿泊について〕

新幹線・新下関駅周辺はあまりホテルがありません。JR 下関駅周辺のホテルまたは下関市街中心地の唐戸周辺のホテルをご利用ください。唐戸はバス路線で下関駅と下関市立大学の間に位置します。例年混み合いますので、予約は早めをお願いします。場合によっては北九州市小倉または門司港のホテルをご利用ください。

◆ ようこそ下関へ！

日本語用論学会第 19 回年次大会が 12 月 10 日、11 日に下関市立大学で開催されます。歴史や地理で下関の地名を覚えた人は多くても、会員のみなさまも下関へは今回、学会で来るのが初めてという人がほとんどではないでしょうか。確かに新幹線も新下関駅はコダマしか停まらないので、決して便利などところではありません。市内のバス移動も、きっと面倒だろうと思われて当然ですが、当日は下関駅と新下関駅で学生にバス案内してもらうので、ご不安のないようにいたします。とはいえ、移動や宿泊では参加されるみなさまにご不便をおかけすること、あらかじめご容赦をお願いしなくてはなりません。

G. Yule が Pragmatics の入門書で、語用論は距離 (distance) を扱う研究と述べています。電子情報が即座に、どこでも入手できる時代に入り、私たちは距離の実感が薄くなってきていないでしょうか。新下関駅から市立大学方面へは土日はバスの本数が少ないので、新幹線から降りられた後は、乗り合いでタクシーをお使いになるのが、最も時間効率が良いこともあります。時間が限られた中、初めての下関はバスやタクシーの車窓から眺めるだけで終わるかもしれません。それだけでも日常から離れた距離を感じ、みなさまにご研究のヒントが浮かぶことと思います。学会前後にお時間がある方は、ぜひ周辺も見て周ってください。関門海峡にフグに川棚温泉と見て食べて楽しむことが豊富にあります。

大会の発表や講演に加え、下関の地がみなさまに楽しい思い出を残せるように精一杯対応いたします。下関の方言では、「とても」の意味で「ぶち」を付け、「ぶちうまい」のように言います。会場でお目にかかることを楽しみにしております。ぶち歓迎します。

(開催校大会委員長 西田光一)

[広報委員会]

* 委員長：山岡政紀 myamaoka@soka.ac.jp
* Newsletter 編集担当：鈴木光代、堀田秀吾